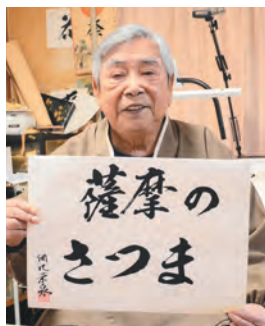


さつま × しごと

Vol.12



さかくち こうき
坂口 綱紀さん (86)

鹿屋市出身。虎居地区在住。熊本で終戦を迎え、母親の姉を頼って宮之城へ。21歳の頃に看板会社を設立。会社は子、孫と受け継がれ、現在は専属書家として筆をふるう。書道と異なる書き方で、数多くの書体を生み出した。雅号は「綱紀栄泉（つなのりえいせん）」。



書家
×
坂口綱紀

▼どつしりとした力強い字や細く流麗な字。毛筆だけが持つ独特の風合いは、ときに書かれた内容よりも私たちに大きな印象を与えます。宮之城屋地区にある株式会社昭和書体は、2007年に誰でも手軽に使えるパソコン用の毛筆書体の販売を開始。元となる字を一つ一つ揮毫するのが86歳の書家・坂口綱紀さんです。その字を書体化するのには、息子で会長の茂樹さんと孫で社長の太樹さん親子3代で作る字は、テレビのテロップや商品のパッケージなどに使われ、今や見ない日はありません。

▼坂口さんは父親が海軍に所属していたため、小学6年生まで基地がある町を転々としていました。中学校を卒業後、画家を志して京都の学校に入学。その後「絵も描けて字も書ける看板屋が向いていると感じた」と看板制作の仕事に就きます。21歳の頃には本町に戻り、看板制作の会社を設立。「とにかく字を稽古しよう」と街中の看板を写し取り、家に帰ってから練習しました」と当時の苦労を話します。

▼やがて息子の茂樹さんが跡を継ぎ、孫の太樹さんも看板制作を学んでいたものの、時代とともに手書き看板は衰退していきました。経営に苦し

む中、転機となったのは毛筆で書き溜められた巻物を見た取引業者の一言。「こんな字が書ける人はいない。書体化する気はないか」そう尋ねられた茂樹さんは、毛筆文字の書体化に乗り出しました。徐々に販売数を伸ばし、人気アニメ「鬼滅の刃」に「黒龍」などの書体が使用され、一気にその名は全国区へ。現在は台湾やアメリカでも取引があります。

▼「一つの書体を作るのに7千字ぐらいが必要です。私は57書体を作りましたが、書体ごとに一つ一つ違うイメージで書きます」と話す坂口さん。数多くの書体を生み出す秘訣は「絵を描くように字を書くこと」「明朝体やゴシック体のように『昭和書体』が広まれば良いと思っっています」と笑顔を見せます。現在も焼酎のラベル作成などの依頼を受けて筆をふるう坂口さん。86歳の書家の挑戦は続いています。



坂口さんが「お気に入り」と話す壁に貼られた自筆の字。このように書かれた字をスキャンし、書体化しています。